えど友ホームページ
https://www.edo-tomo.jp/

えど友

EDO-TOMO

第111号
令和元年
(2019)
9 ― 10

江戸東京博物館友の会会報

目次

江戸・東京 下町めぐり　日本橋浜町…… 1～2
見学会「『江戸名所図会』の挿絵で歩く江戸の町(7)」…3
新役員紹介(私のプロフィール) ……4～5
えど友広小路……6～7
会員からの投稿「山本市郎さんを悼む」／えど友サークルだより／館蔵古文書翻刻だより／友の会めも
友の会特別観覧会
「江戸のスポーツと東京オリンピック」……8
えど東京一景(18) ―旧古河庭園― ……9
江戸博クリップ「江戸博のホール」……9
江戸名所図会を歩く…㊺
[無量山伝通院から白山神社] ……10
催事案内／会員優待のお知らせ ……11～12

江戸・東京 下町めぐり

日本橋浜町

～大川端、風情あふれる町～

「江戸・東京 下町めぐり」は『えど友』88号(平成27年)で日本橋小網町を、93号(平成28年)で日本橋蛎殻町をそれぞれトップ記事で取り上げました。あれから3年、久しぶりの下町めぐり、今回は日本橋浜町です。

日本橋浜町

日本橋浜町は、隅田川を背に人形町と蛎殻町、二つの町に面した日本橋の一番端っこに位置しています。日本橋地区には22もの町がありますが、そのうちで、浜町(1～3丁目)は人口1万人余(6千世帯余)と断トツに多くの人々が暮らしています。緑に囲まれた浜町公園と隅田川の東京水辺ライン浜町発着場を控えた風情あふれる町です。

間部河岸

浜町は江戸時代を通じて武家屋敷地で、正徳(しょうとく)年間(1711～16)、今の1丁目辺り(東日本橋寄り)に間部(まなべ)越前守の広大な屋敷がありました。間部詮房(あきふさ)は一介の猿楽師から6代将軍家宣の側用人にまで上りつめ、新井白石と共に「正徳の治(ちょう)」を断行しました。いつしか庶民はこの河岸を「間部河岸」と呼ぶようになりました。『絵本江戸土産』には「四季ともに月夜の勝景、いと閑静にして、意気揚々たるのながめあり」と記され、酒井抱一は「夕立や 大名走る 間部河岸」というユーモラスな句を詠んでいます。

国学者賀茂真淵(かものまぶち)も田安徳川家を辞した後、この地に閑居、県居(あがたい)の翁(おきな)と称し多くの歌を詠んでいます。「あがた居の茅生(ちふ)の露原かきわけて 月見に来つる都人かも」

清正公寺・浜町公園

今の浜町2丁目には熊本藩主細川越中守の屋敷がありました。細川邸には所領地熊本の日蓮宗本妙寺より加藤清正公の分霊を勧請した清正公寺が建てられ、一般の参詣も許されました。下の3枚続きの錦絵は参詣に向かう芸者衆で賑わう縁日の様子

▲清正大神社参詣群集之図　二代歌川国輝 画　所蔵：中央区立京橋図書館

を描いたものです。屋敷はその後細川侯爵の弟、長岡子爵邸となりました。そこは市内屈指の名園でしたが、関東大震災後は帝都復興事業により「浜町公園」として生まれ変わります。

新大橋

浜町２丁目と３丁目を分断する形で新大橋通りがあります。その先の隅田川に架かる橋がご存じ新大橋です。元禄６年(1693)の創架で、両国橋の大橋に対しての呼び名です。架橋当時は現在よりやや下流の水戸藩浜屋敷があったところに位置していました。「ありがたや いただいて踏む はしの霜」は俳人芭蕉が初めて渡ったとき詠んだ句で、その喜ぶ様子が目に浮かんできます。また橋詰の五つざしのつけやき団子が有名で、「堪(たえ)かたき暑さに休む大はしの 茶やにあまけはなき焼団子」など狂歌に多く詠まれていました。

浜町河岸・明治一代女

浜町の名を全国的に知らしめたのはやはり『明治一代女』でしょう。明治時代に実際に起こった事件を題材にした川口松太郎の小説ですが、映画や芝居で大人気となりました。戦前戦後、明治座の舞台で何度も上演され、花柳章太郎や水谷八重子の当たり役に、また藤田まさと作詞、大村能章作曲の歌謡曲も大ヒット、「♪浮いた浮いたと 浜町河岸に」は今も愛され歌い継がれています。今は埋め立てられて「浜町緑道」になっていますが、浜町堀は大川につながる掘割で、浜町河岸は荷揚げ場としてかつてはその両岸に設けられていました。

明治20年(1887)６月９日、浜町の待合「酔月」の女将花井お梅が、箱屋(箱に入れた三味線を持つ付き人)の峯吉を大川端、細川邸近くの路上に呼び出し、出刃包丁で刺し殺してしまった事件。お梅はきりっとした顔立ちの美人で、谷崎潤一郎は『幼年時代』の中で母親が「いなせな芸者だった。いい女とはあんなのをいうのだろうね」と書いています。とにかく公判の日は、被告を見ようと裁判所には２千人余の傍聴希望者が押し寄せたといいます。その後、特赦減刑となり15年目に出獄しています。

大相撲浜町場所

皆さんは浜町で大相撲の本場所が開催されたのをご存知ですか？　昭和20年(1945)８月終戦、東京は焼け野原となりましたが、相撲協会は一日も早く大相撲を復活させたいと考えました。ＧＨＱによって柔道や剣道は禁止されていました。終戦からわずか３カ月後の11月、戦災で屋根が破損したままの国技館で晴天10日興行が実施されました。場所後国技館は進駐軍によって接収され、代わりに進駐軍の管理下にある神宮外苑相撲場の使用が許可されます。そして晴雨にかかわらず興行できる仮設国技館建設が検討され、都有地だった浜町公園が候補地となりました。ＧＨＱとの度重なる困難な交渉を経て、ついに観客１万人収容の日本橋浜町公園仮設国技館が完成、昭和24年１月場所と５月場所が開かれたのです。

協会は花柳界に声をかけ、地元葭(よし)町の他、新橋、柳橋などの芸者衆が場内の雰囲気を大いに盛り上げ、初日から千秋楽までほとんど満員の盛況でした。ことに１月15日が初めて「成人の日」と制定され、休日となったため超満員となり、戦後初めて「満員御礼」となりました。

１月場所は新横綱東富士(あずまふじ)が優勝、５月場所は大関増位山が決定戦の末に優勝、出羽海部屋まで徒歩で戦後初となる優勝パレードを行いました。当時の番付表を見ると、羽黒山、照国、前田山の３横綱の他、千代ノ山や力道山など人気力士が名を揃えています。日本橋浜町公園仮設国技館は５月場所限りで取り壊され、東京場所は翌年初場所から蔵前の仮設国技館での興行となりました。

明治座

浜町といえば、何といっても「明治座」です。今年で創業146年、東京にある劇場の中で一番長い歴史を持っています。その前身は、浜町河岸にあった「喜昇座」でその後、「久松座」「千歳座」を経て、明治26年初代市川左団次が座元となって「明治座」が誕生します。関東大震災後、昭和３年に浜町公園入口の現在の場所に移ってきました。戦後は昭和25年再建しますが、昭和32年に再び焼失、翌年すぐに再建されました。そして平成５年に現在の18階建て「浜町センタービル」が完成、新明治座(１～６階部分)として再生、賑々しく明治座百年記念公演が催されました。明治６年「喜昇座」から始まった明治座は何度も災禍に見舞われながらもその都度不死鳥のごとくよみがえってきたのです。

▲明治座前の神田祭連合神輿渡御

令和という新しい時代を迎えた今年５月、氏子108町会によって天皇陛下御即位奉祝記念神田祭が執り行われました。晴天の日曜日、ここ明治座前の清洲橋通りには日本橋近隣地区の神輿が集結し、盛大な連合神輿渡御が行われました。威勢の良い掛け声が爽やかな初夏の空に響き渡っていました。

※参考資料

『中央区史』上巻　中央区役所　窪田吾郎『浜町史』下巻『続浜町史』

TBS ブリタニカ編『昭和の大相撲』

【取材】文・写真：広報部会・岡本　脩

江戸東京博物館友の会　見学会　（令和元年６月９日）

『江戸名所図会』の挿絵で歩く江戸の町（7）
―高円寺氷川神社から大宮八幡宮―

雨が降るとの予報は見事に外れ、曇り空でしたが暑からず寒からず、見学会には都合のいい天気でした。高円寺駅南口に集まった一行は、６人ずつのグループに分かれ、随時出発しました。

氷川神社から高円寺

駅前の雑踏を通り抜けるとすぐに、地域の鎮守氷川神社です。しかし皆の関心は、境内に鎮座する「気象神社」の方へ向いたようです。

元々帝国陸軍気象部に属し、気象

▲気象神社

予報の的中を祈願した神社です。そのため戦後は神道指令で撤去されるはずでしたが、調査漏れのため残りました。陸軍時代から、鉄砲の弾に当たらないご利益を求めて祈願する人が多かったという話が伝わるように、撤去調査に漏れた（外れた）こともご利益です。今でも願いを叶えてもらうのは、本社よりも下駄の形をした絵馬にあるようです。奉納された下駄絵馬の多さに圧倒されました。

氷川神社の別当寺だった「高円寺」は、再三火事にあったため、古文書などは残っていません。しかし、地名となったほどのお寺です。それなりの由緒はあるようです。『新編武蔵風土記稿』によると、創建は小田原北条氏。その後は徳川家光が鷹狩りの際、しばしば立ち寄ったとかで今も本堂後ろの高台を「御殿跡」と呼んでいます。しかし、一般の立ち入りは禁じられているため、行くことはできませんでした。

趣のある参道を抜けると、すぐに桃園川緑道です。かつて一帯が水田だった頃、不足する水量を補うため、善福寺川から用水を引いた名残です。おかげで隣接する阿佐ヶ谷村や中野村の田んぼをも潤し、最後に余水は神田川へ流していました。

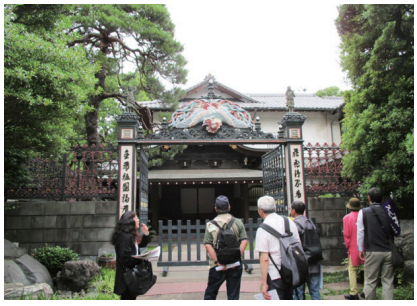
高円寺から妙法寺

桃園川緑道を途中からそれて、環状七号線を青梅街道との交差点まで歩きました。青梅街道は、江戸城の白壁材料である青梅の成木（なりき）や小曾木（おそぎ）の石灰を運ぶため、大久保長安が開いた道路で、当時は成木街道と呼ばれていました。その成木街道（青梅街道）を東へ少し行くと蚕糸の森公園があります。この公園手前沿いの道は、明治22年（1889）、甲武鉄道中野駅が開通した際、新しく開かれた妙法寺への参道（旧参道）でした。

▲妙法寺旧参道入口灯籠

旧参道が環七に合流する手前で左折しました。『江戸名所図会』が記す元々の参道、「堀之内道」へ行くためです。地元では「和田帝釈天通り」と呼ぶ堀之内道を妙法寺まで歩きました。

妙法寺は随所に『江戸名所図会』の面影を留めていました。しかし変わったところもあります。重要文化財になっている鉄門です。「くろがねもん」ではなく「てつもん」と呼ばせるのが、いかにも明治です。ジョサイア・コンドルが、明治10年に造った門です。



▲ 妙法寺大玄関の鉄門

妙法寺から大宮八幡宮

妙法寺で小休止し、直線道路の水道道路をひたすら歩きました。途中で一度横道へそれ、清朝最後の皇帝、愛新覚羅溥儀の実弟溥傑に嫁した旧嵯峨侯爵の娘、浩の実家の跡（杉並区立郷土博物館）へ寄るためです。この頃から雨が降り出したので、皆傘を取り出しました。再び水道道路へ出、路地をぐるぐる回ると、「鞍掛の松」が立っていました。何のために鞍を掛けたのか、いまだに謎ですが、八幡太郎義家が馬の鞍を掛けたとされる松です。

『江戸名所図会』の挿絵には、「根から一丈（約３m）のところで大きく曲がっている」とあります。しかし目の前の松は、わずかに曲がっていますが、ほぼ真っ直ぐです。狭い道路で交通の邪魔をすると切り倒されると心配したのでしょう、渾身の力を振り絞って腰を伸ばしたようです。松に力をもらったお蔭で、最後の力を振り絞って前を見ると、大宮八幡

▲大宮八幡宮

宮の鳥居が見えました。

一直線に続く正参道から一の鳥居をくぐると広い境内へ入ります。続いて二の鳥居から神門まで、境内参道が続きます。神門をくぐり、右手に男銀杏、左側に女銀杏を見ながら本殿へ向かいました。昭和41年（1966）に台湾檜を用いて建造された本殿は、比較的新しいものですが、風格のある造りでした。参加者83人。

【取材】文：広報部会・光田憲雄
写真：同・大橋弘依

（えど友ホームページに地図と写真レポートが掲載されています）

新役員紹介（私のプロフィール）

会　長　林（はやし）　正信（まさのぶ）（事業部会）

振り返ってみますと、定年退職を数年後に控えた頃、「第二の人生」の模索の日々でした。「江戸博友の会」を知り、すぐに入会しました。催事にはできるだけ参加し、やがて「見学会」ガイド役をやりたくなり、事業部会に入会し、現在６年を迎えようとしています。これから先、2022年から再度改修工事に入り、全館休館の「大きなハードル」が控えておりますが、会員全員で心を一つにして飛び越えて行こうではありませんか！！

会　計　日比（ひび）　雅明（まさあき）（事業部会）

江戸歴史に興味を持ち始めたのは江東区に引っ越して来てからです。広重『名所江戸百景』の「五百羅漢さゞゐ堂」などが近所だと知って、名所旧跡を巡る散策を始めてからです。友の会には５年前に入会、当初はセミナーに時々参加する程度でしたが、２年前から事業部会で活動しています。見学会、古文書などの催事に参加することでさらに歴史を知る楽しみが増しました。今年度は役員として友の会に役立つよう心掛けたいと思っています。

副会長　待場（まちば）　浩（ひろし）（事業部会長）

生れ育ちは大阪、長く横浜に住み退職を機に2004年都心に移住。20数年の余生と考え過去の趣味は捨て、フルート・料理・ブリッジの手習い。江戸と無関係だったが、広重の江戸百景や自宅近くに下屋敷跡あり古地図に関心を抱き2014年江戸博友の会入会、１年後事業部会員募集につられて今日までセミナーや見学会等を楽しむ。知識・経験とも無い身に余るこの度の大役、誠意と気概で友の会のお役に立てればと、宜しくお願い致します。

会　計　内匠屋（たくみや）　京子（きょうこ）（広報部会）

以前、集中して博物館、美術館巡りをしたことがあります。それらの中で、天空の城のような江戸博の、５階６階の常設展示室に入ったとき、何ともいえない安堵感があり、将来ボランティアをすることがあったら「ここにしよう」と思いました。友の会に入会し、部会に入って10年が経ちました。見学会や学習会、セミナー等にも参加し同好の皆さまとの交流も楽しみです。今期の役員として少しでもお役に立てればと思っております。

副会長・事務局長　前田（まえだ）　太門（たもん）（広報部会長）

30代の初めからパソコンに興味を持ち、今に続いています。インターネットが一般に利用できるようになると、「モザイク」というブラウザを使い始めました。また、個人用のホームページを作りました。定年後友の会に入り、友の会ホームページの管理を担当しています。このホームページでは、江戸東京に関係する展覧会の情報、江戸東京の情報を発信しているホームページのリストも提供しています。ご利用をお待ちしています。

國定（くにさだ）　美津子（みつこ）（事業部会員）

入会後、広報・総務・事業の三部会に入部し、館外を含め10ヶの歴史研究会の会員でした。今は総務部会・事業部会と役員会の他、６ヶの会に減じても、増々仕事の頃より忙しい感じ…。パソコンなどは便利ながら、エラーや故障も多く、世話のかかるペットのような存在です。電気・インクを絶やせば動かず、ご機嫌を損なえば駄々をこね、サーバーの都合で買い替えを余儀なくされることも。未来は、機械に振り回される時代になるでしょう。

副会長　秋広（あきひろ）　澄江（すみえ）（総務部会長）

友人に誘われて入会した「友の会」ですが、総務部会に参加してもう９年になります。総務の仕事は、部員全員が協力して行うことが多いので終わったあとはホッとして、うれしい気持ちになります。それが楽しくて、続けられたのかもしれません。また、サークルや見学会で、初めての街を散策するのも楽しい時間です。お引き受けした役員の仕事は私にはいささか重荷ですが、部員の皆様に助けていただきながら頑張りたいと思っています。

中村（なかむら）　明義（あきよし）（事業部会員）

「入江町の鐵（てつ）」と呼ばれた、鬼平犯科帳・長谷川平蔵の生育地である本所入江町（現墨田区緑）で生まれた。勝小吉・麟太郎（海舟）が住み、天保２年に麟太郎が犬に噛まれ重傷を負った地でもある。数年前「広重『名所江戸百景』周辺探訪」に参加して、現代の風景を見ながら江戸へタイムスリップし「江戸の風」を感じたのは新鮮な驚きであった。以来、事業部会に入会し２年になる。友の会の会員も自分も楽しめる活動をしていきたい。

５月24日開催の第19回定期総会で選出された新役員15名の役割分担と、プロフィールをご紹介します。イラストは総務部会員の藤井文乃さんです。新役員へのご支援、ご協力を今後ともどうぞよろしくお願い致します。

中村　貞子（広報部会員）

偶然、深川の地に住むようになって22年目。相撲好きなのでなんとなく両国の地に憧れがあったのがそもそものきっかけ。それまで深川は特に意識したことはなかったが、住んでしばらくしてから江戸博があるのに気づき、友の会に入会して今年で13年目。思えばこの地に来てから出会った人たち、知った歴史、東京の街歩きと、これまでとは全く違う新しい世界が開けたと思う。今期は友の会をどうするか、皆で考えることが多くなりそうだ。

平川　亮一（館蔵古文書翻刻プロジェクト）

役員も２期目に入りました。江戸好きが高じて友の会に入り10年、現在は江戸博所蔵の古文書を翻刻、江戸博で出版という地味な分野を担当しております。日頃切絵図を手に友人達と東京を歩いていますが、意外と江戸の基層が残っているのに驚き、江戸が東京とつながっているのを実感します。長い江戸博の休館も終わり、再び友の会の活動も活発になりますが、微力ながら役員として友の会の発展に頑張っていきたいと思っております。

鈴木　とき子（総務部会員）

会報誌『えど友』が届くとまず催事案内に目を通し、時間(近頃は身体)が許す限り参加しています。見学会のコースは私にとって初めての地域が多く、名前だけは知っているお寺・建物・名所を、友の会に入らなければ大げさかもしれませんが、一生行かなかったかもしれません。また『えど友』に掲載の江戸時代の庶民の暮らしや地域の風習、時代に生きた人物など、勉強になります。これからも友の会をよろしくお願いします。

監　事　畠中　勇

来年は東京オリンピック。これからの１年はオリンピックの話題で、日本中が沸き立つでしょう。前回オリンピックの時、私は20代半ば(若かったなー)、開会式当日の抜けるような青空とそこに描かれた五輪のマークを鮮やかに記憶しています。江戸博でもオリンピックに向け、多彩な事業が展開されますが、友の会も合わせ充実したものとなるよう願ってやみません。友の会役員として７年目、引き続き監事を務めさせていただきます。

髙田　利正（総務部会員）

８年前から総務部会に所属。友の会への入会は2010年。時代小説に出てくる江戸の地名や生活に興味があり、入会以前から江戸博へは展示観覧やセミナーの受講に時々来ておりました。出身は、昔の地名で播州三日月、現在は兵庫県佐用町。猪や鹿が家近くまで出てくる、山間部の小さな町です。最初の勤務地は姫路城近くでしたが、昭和36年に東京に出稼ぎに来て、そのまま居残り。31年前から横浜に住み、今は「浜っ子」。

監　事　小笠原　広樹

江戸博との関わりは４、５年前になりますが、参事の仕事に携わっていたことがあります。また、江戸博の開館時には都で広報担当をしていて、鈴木都知事が日本橋を渡る時に居合わせたことも思い出されます。友の会は、館と江戸東京の歴史・文化のファンの集まりとして、様々な魅力ある事業を展開しています。監事に再任となりました。これからも、入っていて良かったと実感できる充実した会となるよう努力していきたいと思っています。

上野　庸子（総務部会員）

10年前に退職したのを機に、地域で活動をと「すみだ生涯学習センター」で講座の企画と運営を始め、古代の文学が好きで「万葉集」の講座の企画もしています。時を同じくし歴史の勉強や活動などできると友の会に入会。江戸から明治へもまだ150年ほど前のことなのに、江戸が遠い昔のことと思え、勉強したいとセミナーなど参加しています。会報の発送のお手伝いができればと総務部会の活動を始めました。よろしくお願いします。

カット：
福島信一さん

会員からの投稿

山本市郎さんを悼む

市郎さんとの出会いに感謝

玉木達二

私事にて恐縮ですが、第二の人生の楽しみを探しに両国にやってきたのが「友の会」発足の平成13年４月でした。常設展内「江戸図屏風」の前で十数人のお客を前に背広姿のダンディーなガイドさんが、物静かに淡々と解説をしておられました。何とも面白く、最終コーナーに来たところで「今度こういうものができたので、ご興味がありましたらどうぞ」と手渡されたのが「友の会入会案内」でした。

以後「友の会」「ボランティア」両面で充実した幸せな人生を与えてくれたのが、この市郎さんとの出会いでした。市郎さんには「博識」「物静か」「後輩思い」「控え目」等々いろいろな表現が当てはまると思いますが、反面「落語好き」「駄洒落好き」など意外な面もお持ちでした。

お亡くなりになられた５月28日の前週23日には、ご一緒にボランティア活動をやらせていただきました。いつも通り「今日は３回もやらせてもらった」とお元気そのものでした。あまりに急な悲報、いまだに信じ難い思いです。今はただ市郎さんとの思い出を大切に、出会いに感謝です。「誠にありがとうございました」。

(追記)何！「ありがとう」だと「蟻が十なら芋虫ゃ二十歳」。何！「ありがたい」だと「蟻が鯛なら芋虫ゃ鯨」。こんな声が聞こえてきそうです。

敬愛し続けた山本さん

松原　良

あのお元気だった山本市郎さんの突然の訃報に接し、大変驚き悲しい思いをしてから、もう１カ月以上が経ってしまいました。

思えば私が山本さんに敬愛の念を持つようになったのは、友の会発足当時のことです。その日、友の会の何らかの運営に関わることを希望する人が集められました。今でいえば三部会合同の部会員募集・説明会議のようなものですが、全会員から募集し、30人ほどが集まりました。ところが、１人の人が事前の申し込みをしているのに受付名簿から漏れていて、受付のところでカンカンに怒り出し、会議どころではなくなったのです。このとき、山本さんが穏やかに説得にあたり、その人も矛を収めたのです。私はといえば「名前漏れ江戸っ子一人怒り出し」などと川柳を作って遊んでいました。しかしこの山本さんの手際を見て、こんな立派な会長ならこの会のことに真剣に協力しようと決めたのでした。以来、私は山本さんを敬愛し続けてきました。

ご存知のように、山本さんは友の会の設立準備委員会、発起人会の中心で、友の会初代会長です。特に２期目のときに山本さんが再任を受けてくださったのが、その後の友の会の発展に大きな力になったと思い、大変感謝しています。今は亡き山本さんのご冥福を心からお祈りします。

えど友 サークルだより

◆落語と講談を楽しむ会

６月18日(火)月番は伊東敏男さん。国立演芸場で古今亭今輔「葛湯」、桂小文治「七段目」、三遊亭右左喜(うさぎ)「銀婚旅行」、古今亭寿輔「老人天国」の落語の他に、紙切り、奇術、浪曲、コメディなどを鑑賞した。結構笑えた。参加者18人。

７月16日(火)月番小山一成さんの桂文珍コレクションの中から、「老婆の休日」「ヘイ・マスター」「七度狐」三席を鑑賞した。参加者18人。

◆藩史研究会

６月14日(金)鶴谷博幸さんの発表。麻田藩は、摂津国豊島郡・川辺などを領した藩で、現在の大阪府の豊中市蛍池に陣屋跡がある。初代藩主は青木一重。元和元年(1615)、麻田藩は1.2万石で立藩するが、元和３年、弟である旗本青木可直に２千石を分知したため、１万石に減じた。養子を迎えながらも、幕末・明治まで14代続くことになる。参加者15人。

７月12日(金)桜井広幸さんの発表。赤穂藩は、播磨国赤穂郡加里屋を領した。元和元年、赤穂領は池田輝政の５男池田正綱が継ぎ、赤穂藩３万５千石が成立。16年後、輝政の６男池田輝興が入封したが、発狂により正保２年(1645)に妻を殺害したため改易となった。同年、浅野長直が５万３千５百石で入封した。しかし、元禄14年(1701)、３代長矩(ながのり)が江戸城における刃傷事件で、浅野家赤穂藩は断絶となった。翌年、永井直敬(なおひろ)３万３千石が入封したが、４年後信濃飯山へ移封。宝永３年(1706)、森長直が２万石で入封し、以後幕末・明治まで森氏は162年間 12代続いた。参加者11人。

◆「米屋田中家明治日記」を読む古文書の会

６月13日(木)米屋久右衛門の「日記」明治９年10月15日～11月８日。参加者８人。

６月27日(木)「日記」明治９年11月９日～12月16日。参加者６人。

７月８日(月)「日記」明治９年12月17日～10年２月１日。参加者６人。

７月23日(火)「日記」明治10年２月２日～４月５日。この年、西南戦争が起こり、４月３日には田中家のある区でも、「九州筋暴徒之義」につき戸長(小区の区長)から献金について話し合うよう達しがあった。15名の各町総代が寄合い献金することに決まった。しかし理由は分からないが、後になって取りやめられた。参加者７人。

◆『江戸名所図会』輪読会

６月21日(金)担当は船津恭子さん。今回は浅草寺の東側に位置する報恩寺、誓願寺、日輪寺、そして天嶽院の四つのお寺である。日輪寺は時宗の総触頭。開山の他阿(たあ)真教上人が、豊島郡柴崎村の草むらの中にある祠(神田明神)を見つけ、その傍らに草庵を結んで柴崎道場と号した。これが日輪寺の始まりである。明暦の頃、現在地に移転。住職は神田明神の祭りには今でも玉串を捧げに行く。参加者20人。

７月25日(木)担当は大澤憲一さん。今回は浅草寺の西側、かっぱ橋道具街を挟んだ九つのお寺。この内六つは江戸末期とほぼ同じ場所、三つは移転し現存している。神田山幡随意院は、広大な敷地を持ち、新知恩寺とも呼ばれた浄土宗十八檀林の一つ。開山幡随意上人は慶長７年には京都知恩院の住職となり、紫衣を賜る。同９年には、家康に招かれて一宇を神田に開き神田山新知恩院とした。72歳で幕命により九州に赴き、キリシタンの改宗に努めた。参加者18人。

◆日本の大道芸伝承会

６月12日(水)発声練習として「外郎売り」と「がまの油売り」を行った。深川江戸資料館主催イベントが９月28日(土)に確定、今回も出演することが決定したため新たな演目を探すため色々試した。参加者４人。

７月10日(水)各自の抱えている演目により一層磨きをかけることにした。参加者４人。

◆江戸を語る会

６月29日(土)青木和人さんが「江戸城はどのようにして造られたか」の演題で話された。江戸城の建設は徳川家康の命により1590年から始まり、1640年家光が城全体を完成させた。絵や地図も豊富に使い、濠の役割、築城の各大名の負担、石垣造りの工程の説明をされたので江戸城建設の全容が理解でき、江戸城への興味が強まった。参加者６人。

◆太田道灌ゆかりの地を訪ねる

６月27日(木)今回はマイクロバスを利用し川越市および川島町の道灌ゆかりの地をめぐった。砂久保稲荷神社は日本三大奇襲の一つ「河越夜戦」で北条方の陣場のあったところ。川越城大手門跡の太田道灌像を見る。東明寺境内の「河越夜戦跡」の碑などを見学。道灌橋、道灌屋敷跡(住宅地)、川越氷川神社では道灌手植えの竹を見学。浮島稲荷神社で川越城築城時の沼沢地を偲び、富士見櫓跡、三芳野神社に参拝後、川越城本丸御殿に寄り見学、河越館跡史跡公園、長福寺で開山雲崗俊徳禅師と太田道灌公の銅像を見学。川島町の養竹院で太田道灌陣屋跡の碑を見学した。参加者26人。

６月30日(日)１回目と同じコースを巡った。参加者24人。

７月25日(木)横浜歴史博物館で開催中の企画展「“道灌以後”の戦国争乱」を中心とした見学会。まず講堂で今回の企画展について学芸員阿諏訪青美(すわひろみ)さんからレクチャーを受けた後企画展を見学、続いて常設展も見学した。さらに、館外に隣接した大塚・歳勝土(さいかちど)遺跡公園も散策・見学した。参加者48人。

◆文士散歩

６月15日(土)「夏目漱石の育った早稲田を歩く」を実施。大江戸線牛込柳町駅に集合。牛込氏・山鹿素行の墓所宋参寺へ。漱石山房記念館で長塚節の名作『土』の序文として書かれた漱石直筆原稿「『土』に就いて」、他に漱石の自筆扁額、書簡メモ貼り交ぜ屏風などを鑑賞し、漱石を取り巻く人々について資料を見ながら語る。次に、漱石の父が名付けた夏目坂から夏目漱石誕生の地の石碑、夫妻が虫封じにお参りした穴八幡宮を散策した。参加者６人。

７月20日(土)「落合文士村を歩く・林芙美子の反骨精神」を実施。大江戸線中井駅に集合。林芙美子記念館へ。見せるための客間よりも茶の間、風呂、台所などに贅を凝らし、家族との暮らしに安らぎを求めた芙美子の建物への想い入れの深さが感じられた。敷地内の石蔵ギャラリーにて『放浪記』『浮雲』、ロンドンでの日記などを見る。次に佐伯祐三アトリエ記念館、中村彝(つね)アトリエ記念館を訪れた。参加者８人。

●各サークルとも引き続きメンバーを募集しております。参加希望の方は、はがきに①サークル名②会員番号(必須)③氏名を記入の上、友の会事務局へお申し込みください。

館蔵古文書翻刻だより

◆Ａ班『新古改撰誌記』

最後の朝鮮通信使が派遣された文化八未年(1811)四月、中間等の通常勤務中の服装について上司に報告した内容の主なものを記載する。御中間：羽織袴着勤、御中間頭：自分羽織着、御供組頭：御役羽織着、但し年始・五節句・御祝日は麻上下着のこと、御簾指之者：御役羽織着、両丸(本丸・西丸)については、御中間目付：御役羽織着、世話役：年始・五節句・御祝日は麻上下着のこと、御中間押：御役羽織着、御持鑓之者：御役羽織着、両丸兼勤の御長屋御門番人：自分羽織之者は年始・五節句・御祝日は麻上下着のこと。以上のように下働きの五役であっても、それぞれの立場や役職で細かく決められていたことが分かる。

友の会めも(開催日と人数)

令和元年６月～７月

◆役員会６月11日(火)17人。７月９日(火)15人。◆事業部会６月４日(火)22人。７月２日(火)22人。◆広報部会６月18日(火)10人。７月16日(火)10人。◆総務部会６月25日(火)17人。７月23日(火)10人。◆古文書講座 入門編：６月５日(水)午前80人・午後88人。７月３日(水)午前90人・午後85人。初級編：６月19日(水)午前69人・午後73人。７月17日(水)午前74人・午後84人。中級編：６月15日(土)午前34人・午後32人。７月20日(土)午前34人・午後31人。◆館蔵古文書翻刻プロジェクト６月６日(木)Ａ班８人。Ｂ班６人。６月20日(木)Ａ班７人。Ｂ班８人。７月４日(木)Ａ班７人。Ｂ班６人。７月18日(木)Ａ班８人。Ｂ班６人。

江戸東京博物館友の会特別観覧会（令和元年７月12日）

特別展「江戸のスポーツと東京オリンピック」

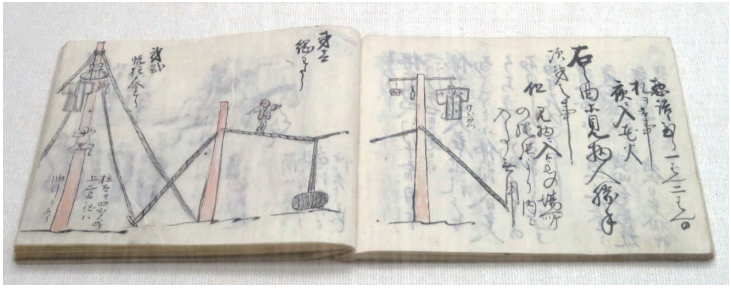
７月12日(金)に２年ぶりとなる特別観覧会が開催されました。17時から１階会議室で担当の杉山哲司学芸員による見どころ解説があり、その後、友の会会員だけで19時まで観覧しました。

「江戸のスポーツ」について、展覧会や書籍・雑誌で取り上げられたことは今までなかったように思い、興味を抱きながら見学をスタートしました。

第１章　江戸の「スポーツ」事情

江戸時代に「スポーツ」として捉えられるものに、水術、剣術、弓術、馬術、打毬、相撲、蹴鞠などが挙げられそうです。最初に目を引いたのが、大きな浮世絵「極暑あそび」(三代歌川豊国)でした。隅田川の屋形船の前でユーモラスな泳ぎを披露しています。「かへるおよぎ」「徳利もち立游」など、アーティスティックスイミング(シンクロナイズドスイミング)のようでした。次に、剣術の面・胴・小手の防具一式がありました。これは、江戸末期に使用された直心影流剣術で使用された防具で、剣道の防具に近いものでした。８代将軍吉宗は、武芸を奨励し、将軍の前で行う武芸上覧や武芸をテストする武芸吟味が行われるようになり、また、流鏑馬、打毬などの競技も再興しました。上野寛永寺で行われた流鏑馬の、疾走する馬上から的に矢を射る様子と多くの観客を描いた「流鏑馬絵巻」が展示されていました。紀州徳川家の中屋敷であった赤坂邸(現在の赤坂御用地)に、東西が崖で囲まれた谷に設けられた馬場がありました。ここで藩主らが観戦しているポロに似た日本古来の打毬を描いた「青崖埒打毬之図」を興味深く見入りました。打毬の杖と毬も展示されていました。

庶民の間では、かつて宮廷で行われていた蹴鞠の愛好者が生まれ、鍛錬の成果を将軍が上覧するということもありました。また、大相撲の興行は人気を集め、人気力士を描いた錦絵なども数多く出版されました。取組の勝負を一覧にした勝負付け、星取表など相撲の情報を伝える『相撲起顕』が出版されました。相撲の錦絵、『相撲起顕』、雷電為右衛門の道中羽織などが展示されていました。



▲横須賀製鉄所で行われた運動会の様子

第２章　近代スポーツと東京

慶応４年(1868)に横須賀製鉄所で行われたイベントが運動会のルーツの一つと考えられます。このイベントの様子を描いた絵を見ると、「帆柱登り」、「綱わたり」などがあり、テレビ番組の「SASUKE」を思い出しました。大正期のテニスラケットと卓球ラケットを見ると、よく似た形でテニスラケットはガット面が狭くグリップが長くなっていました。卓球ラケットは、今のラケットとは別物で、玉を受ける面は皮を張ったもので、グリップがテニスラケットのように長くなっていました。卓球を英語ではテーブルテニスといっているのが理解できました。

第３章　オリンピックへの道

日本が初めて参加したオリンピックは、明治45年(1912)の第５回ストックホルム大会で、陸上の金栗四三と三島弥彦が出場しました。その時のユニフォーム、シューズ(足袋)などが展示されていました。大正９年(1920)、アントワープ大会でテニスの熊谷一弥がシングルスで銀メダルを獲得して日本初のオリンピックメダリストになり、ダブルスでも柏尾誠一郎と組み、銀メダルを獲得しました。熊谷が使用していたラケットを見ると、数十年前に一般に使用されていた木製のラケットと同様の形でした。昭和11年(1936)のベルリン大会の棒高跳決勝で、西田修平・大江季雄の両選手は５時間以上の接戦による疲労、天候の悪化などを理由に２、３位決定戦を辞退しました。帰国後、二人は銀と銅のメダルを半分に割り、つなぎ合わせたメダルに作り直し、後に「友情のメダル」と呼ばれるようになりました。そのメダルを見ることができました。

第４章　1964年東京オリンピック・パラリンピック

1964東京オリンピックのポスター、日の丸とオリンピックのマークを組み合わせたもの、陸上のスタートダッシュの瞬間を捉えたものなどがあり、懐かしく思いました。日本代表選手の赤のブレザーと競技役員の青のブレザー、チェコの体操選手チャスラフスカのユニフォーム、各種競技プログラムなどが展示されていました。

▲ユニフォーム

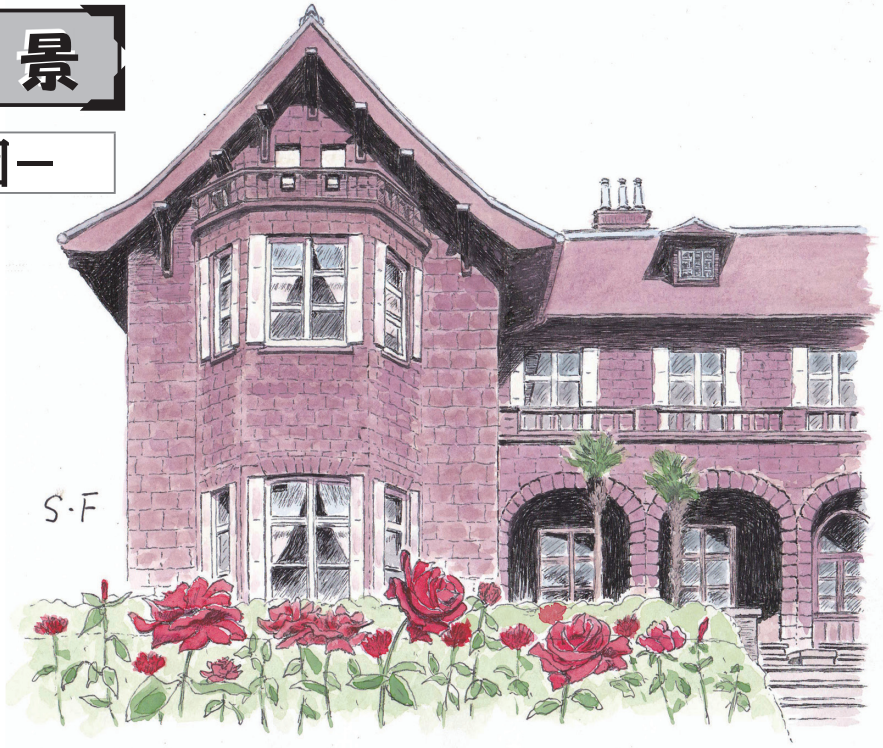
第５章　2020東京オリンピック・パラリンピックに向けて

開催まで１年を切った東京2020大会の概要や見どころについて紹介していました。　　参加者51人。

【取材】文・写真：広報部会・前田太門

えど東京一景

(18) ―旧古河庭園―

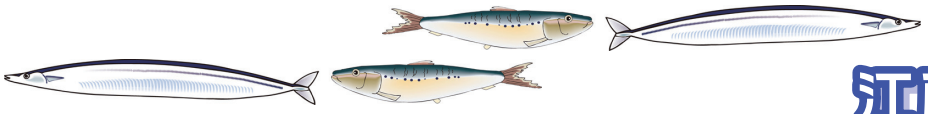


梅雨の晴れ間の６月中旬、旧古河庭園に行きました。庭園は武蔵野台地と低地の斜面際を利用し、上段の前庭、中段のバラ園、下段のツツジ園、最下段の日本庭園に分かれています。前庭には季節ごとの花々がありますが、中心はやはりバラです。中段のバラ園もちょうど二番花の時期で、馥郁(ふくいく)とした香りに包まれていました。園内には約90種、180株あるそうです。ツツジ園は花の季節が終わったところでした。階段両側の富士山の溶岩を使った石積みを横に見ながら下りていくとクチナシの芳香が漂ってきました。満開の青いアジサイをはじめ、モミジ、ウメ、マツなどどれも長い年月を感じさせます。心字池を中心に枯滝・大滝・中島が配置され、数種類の灯籠や石塔、茶室もあります。この日本庭園は京都の庭師小川治兵衛(じへえ)が大正８年(1919)に完成させ、今年100年目を迎えました。

陸奥宗光の次男が養子に入って古河家の所有となった陸奥邸跡に建つ旧古河邸と西洋庭園は、西郷隆盛の弟従道(これみち)の娘が嫁いだ３代目当主のとき、旧岩崎邸やニコライ堂なども手がけたコンドルが設計、大正６年に竣工しました。１階には小食堂、大食堂、撞球室、書斎、応接室があります。

大食堂の天井には精巧な彫刻が施(ほどこ)されています。２階は中央のホールを数個の洋室がとり囲んでいます。しかしドアを開けると内側に襖や障子が設(しつら)えてあり、仏間、来客用洋室・和室、ほかに家族用の居室があります。主寝室は壁紙が来客用洋室と色違いの模様で、庭園全体を見下ろせます。現在、旧古河邸は予約制見学会や、喫茶室、音楽会、展示会としての利用もできます。数十あった大正期の洋館の中において辛うじて残った貴重な文化財で、平成18年には庭園とともに国の指定名勝となりました。

【取材】文：広報部会・内匠屋京子／イラスト：同・福島信一



江戸博クリップ

江戸博のホール

管理課舞台管理担当係長　大野 敏和（おおの としかず）

平成30年５月から江戸博の舞台管理担当として着任しました大野と申します。

私は日本の伝統芸能を主に上演する某劇場に30数年舞台照明として関わってきました。

伝統芸能(古典ともいいます)は、いろいろと決まり事(定式・じょうしき)が有り、それらを覚えないと仕事に成らない事が多いのです。そして演者たちは、その定式をスタッフ(裏方さん)は知っていて当たり前を前提に仕事をしていきます。

まあ私の仕事の事はこれぐらいにして、江戸東京博物館の事を此処に来るまで知りませんでした。ましてホールが有る事など思いもよらなかった次第で、人生とは本当に解らないものです。

伝統芸能に力を入れる為のホール改修とかで舞台技術スタッフを募集しているとの事で、何故か今ここにいる次第です。

舞台の無い現場に何で私が居るのか不思議な感じで１年近くが過ぎ、やっとホールもなんとか出来上がり本職に戻れるかな(？)と安堵しております。

博物館の中のホール…何かおまけのような印象ですが徐々に意識を変えて、博物館と共存出来るホールに成れたらユニークな存在になると思うのですが、いかがでしょうか？

とりとめの無い文で失礼いたしました。時間になりましたので、ここいらで失礼いたします。

◆このコラムは江戸東京博物館のいろいろな職務の方々に執筆をお願いしています。

江戸

名所図会を歩く…㊺

[無量山伝通院から白山神社]

沢蔵司稲荷のムクノキ

今回は小石川から白山へと歩きます。歩いたのはアジサイが見頃となった6月上旬から中旬でした。

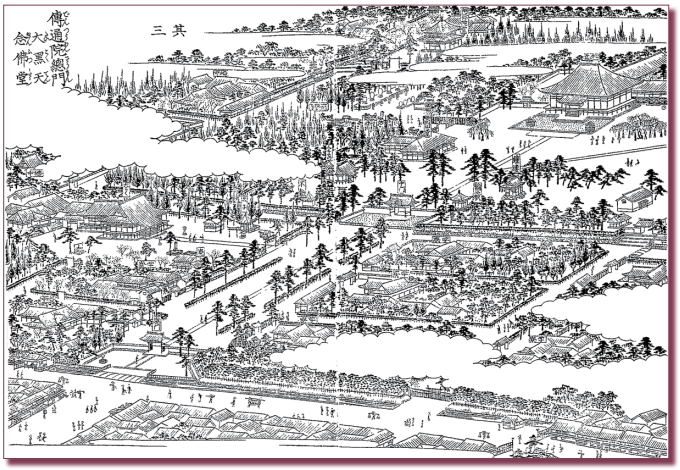
無量山伝通院

東京メトロ後楽園駅下車。改札を出てすぐ左手に礫川公園があります。かつては小石川がここで水戸徳川家上屋敷内へ流れ込んでいました。春日通り側には通り名の由来となった春日局の像が立っています。

富坂を上り伝通院前交差点で通りを渡ると、無量山伝通院の山門が脇道の正面に見えます。元の地(「極楽水」)から、家康の生母於大の方(法名伝通院殿)埋葬の際に移転して伝通院となりました。図会の挿絵を見ると、道の入り口に総門があり中門(現在の山門)までの参道両側に学寮が並んでいる様子が分かります。明治41年(1908)の火災により江戸期の建物は焼失しており、現在の山門は平成24年築造のものです。本堂左手の鐘楼堂も建て替え予定となっており、訪れた日には地鎮祭が行われていました。墓地には於大の方・秀忠の娘千姫・家光の正室孝子など徳川家ゆかりの墓が立ち並んで壮観です。また志士清河八郎・詩人佐藤春夫・画家橋本明治など著名人の墓も多く、特に作家柴田錬三郎の墓はピラミッド型の墓碑に球形の文学碑というユニークなものです。

続いて、かつて塔頭だった寺を巡ります。山門右手の善光寺坂を下っていくと、道の中央に樹齢約400年のムクノキが立っています。左手の慈眼院にある沢蔵司稲荷のご神木で、伝通院の修行僧だった沢蔵司の魂が宿っているといわれます。平成26年に文京区の天然記念物に指定されたことから、毎年ムクの日(6月9日)の前後(今年は8日)に地元の町会が「ムクノキ祭り」を開催するようになりました。慈眼院の本堂には「沢蔵司」の扁額が掛かり、その上に一対の狐が描かれていて、沢蔵司稲荷の社殿と一体という感じです。右手の階段下には赤鳥居が立ち並び、奥に稲荷が祀られていますが、よく見ると供物台の下に洞窟跡らしきものがあり、かつて狐が住んでいた霊窟といわれています。

伝通院山門に戻ると斜め前が大黒天のある福聚院ですが、本堂が福寿幼稚園の奥にあるため、普段は勝手に入れません。休日に行くと、本尊の木造大黒天坐像の写真が飾ってありました。続いて伝通院左脇の道を進んでいくと、左手に見樹院・法蔵院・真珠院が並んでいます。いずれも本堂は現代風の建物ですが、真珠院の墓地には於大の方の生家である水野家の墓所があり、寺号の由来となった水野忠清(法号真珠院殿)をはじめ多くの墓があります。



▲長谷川雪旦：伝通院総門　大黒天　念仏堂

中台山光円寺から吉水山宗慶寺

さらに道なりに進んでいくと、右手に中台山光円寺がありますが、こちらも総門を入ると幼稚園になっています。奥の建物の2階にある本堂への階段には鎖が掛かり、1階の寺務所に声を掛けても応答がなく、図会に記されている阿弥陀如来と本木薬師如来を確認することはできませんでした。墓地には狂歌師鹿都部真顔や跡見学園創立者跡見花蹊の墓があります。

近くの善仁寺脇を進むと、吹上坂の中程に出ます。向かいの小石川パークタワーの中庭には吉水山宗慶寺にあった「極楽水」という井戸が近代風に整備されて残っています。宗慶寺は隣の播磨坂付近にありましたが、道路工事に伴い吹上坂の坂下近くへ移転しています。本堂の階段脇には、家康の側室茶阿局墓碑(宝篋印塔)がひっそりと立っています。

御薬園から白山神社

坂下から千川通りを渡って直進すると、正面に小石川植物園の森が広がっています。この地には元和2年(1616)に白山権現(現白山神社)が遷座、その後慶安4年(1651)に白山御殿が造立、さらに貞享元年(1684)には麻布にあった幕府の御薬園が移転しました。右手の正門から入ってしばらく行くと建築中の公開温室があり、一角に「乾燥場跡」として薬草の乾燥作業を行った石畳が残されています。また向かい側には「薬園保存園」があり、当時栽培されていた薬用植物を見ることができます。奥へ進むと、青木昆陽が甘藷(サツマイモ)の栽培を試みたことを表す「甘藷試作跡の碑」が立てられていますが、色と形がまるでサツマイモのようです。さらに先には、享保7年(1722)に設立された小石川養生所(療病院)の井戸が残されています。

植物園の右脇から御殿坂の上り、善光寺坂の下りを経て白山通りを渡り、京華通りを進むと、白山神社裏の急な石段が右手にあります。上るとすぐ境内社の八幡神社があり、八幡太郎義家が戦勝祈願のために旗を掲げたという「旗桜」の老樹があります。隣には由来を記した「旗桜記の碑」も立てられています。ちょうど境内では「文京あじさい祭」が開催されており、色とりどりのアジサイの中を多くの人が散策していました。最も混雑しているのは本堂裏手にある浅間神社で、山全体がアジサイで覆われています。また鳥居の手前には、中国の革命家孫文を記念した「孫文先生座石の碑」がありますが、祭の期間中は色鮮やかなアジサイの鉢が前に積み上げられて撮影スポットになっています。鳥居正面の道から都営地下鉄白山駅はすぐです。

【取材】歩いた人(文・写真とも)：
広報部会・菊池真一

(えど友ホームページに地図と写真レポートが掲載されています)

催事案内

古文書講座

◆９月から第２期を開講

すでに申込は締切っておりますが、９月から下記日程で第２期を開講します。

◆入門編　講師：田中潤さん(学習院大学非常勤講師)
- 開催日：９／4(水)、10／2(水)、11／6(水)

◆初級編　講師：安藤奈々さん(学習院大学大学院史学専攻)
- 開催日：9／18(水)、10／16(水)、11／20(水)

◆中級編　講師：吉成香澄さん(徳川林政史研究所非常勤研究員)
- 開催日：9／21(土)、10／19(土)、11／16(土)

- 時間：各講座とも
  午前の講座は10時30分～12時30分
  午後の講座は14時～16時
- 会場：各講座とも江戸博１階会議室
- 定員：各講座とも100人(会員のみ)
- 参加費：各講座とも全３回2,000円(初回一括払い)

【企画担当責任者】川上由美子(事業部会)

友の会特別観覧会

●特別展「士 サムライー天下太平を支えた人びとー」

◆９月14日(土)～11月４日(月・休)の間、特別展「士 サムライー天下太平を支えた人びとー」が開催されます。本展では、現代のサムライイメージの原点である江戸時代のサムライ＝“士”の暮らしや仕事のありさまをご覧いただき、総城下町として世界有数の大都市であった江戸で、サムライがいかに活動していたのか、絵画作品や古写真、サムライの所用品から浮き彫りにし、生のサムライの生活と姿を再現していきます。本展企画担当の田原昇学芸員から「見どころ解説」を聞き、会員だけの観覧会をゆっくりと心ゆくまでお楽しみ下さい。

- 開催日：９月20日(金)
- 受付開始：16時30分
  17時～17時30分　見どころ解説　１階会議室
  17時30分～19時　自由観覧　１階特別展示室
- 申込締切：９月９日(月)必着
- 会場：江戸東京博物館　１階会議室／１階特別展示室
- 定員：120人　同伴者可(はがきに氏名連記)
- 参加費：会員500円・同伴者700円(当日払い)

【企画担当責任者】阪上克弘(事業部会)

友の会セミナー

第183回「杉浦日向子の視点～江戸へようこそ～」

講師　野呂達矢さん(江東区芭蕉記念館次長)

◆NHK「コメディーお江戸でござる」でもお馴染みの杉浦日向子さんの言葉に「あれ、私が住むべき本当の町は江戸だったんじゃないかと思うことがありますよね」というものがあります。そんな杉浦日向子さんは「江戸からの旅人・タイムトラベラー」などと評されていました。彼女は平成17年に亡くなられましたが、ご存命であれば還暦を迎えていました。深川江戸資料館では、現在、企画展「杉浦日向子の視点～江戸へようこそ～」(11月10日まで)が開かれています。セミナーではこの企画をされた前深川江戸資料館次長の野呂先生に、彼女の多様な仕事や魅力などを様々な角度から紹介していただきます。

◆講師略歴：のろ・たつや
昭和37年(1962)文京区生まれ。東洋大学文学部卒。社会教育主事取得。昭和62年江東区文化センターに勤務。その後、いくつかの地域文化センターで、講座、グループ援助、イベント、展示事業などに関わる。平成26年から５年間、深川江戸資料館に勤務。相撲・長屋・歌舞伎・時代小説などの展示に関わる。

- 開催日時：10月12日(土)　14時～15時30分
- 申込締切：９月30日(月)必着
- 会場：江戸東京博物館・１階小ホール
- 定員：130人　同伴者可(はがきに氏名連記)
- 参加費：会員500円・同伴者600円(当日払い)

【企画担当責任者】中村明義(事業部会)

第184回「幕府・薩摩を支えた琉球の主体性ー薩摩・琉球・中国ー」

講師　安藤奈々さん(学習院大学大学院史学専攻)

◆1609年、幕府の許可を得た薩摩藩による琉球侵入によって、琉球は昔からの中国との朝貢関係を維持しつつ、薩摩や幕府に対しても従属しなければならないという、二重の複雑な王国体制を余儀なくされます。近世における琉球の状況は非常に厳しかったものの努力が実を結び、徐々に王国は国力を高めながら統治体制は安定し、文化も大きく花を開いていきます。ただ「長良川の鵜のように搾取されていた」琉球ではなく、薩摩や幕府との関係に主体性をもち、さらには薩摩を支えた琉球について考えていきます。

◆講師略歴：あんどう・なな
日本近世史研究者、1982年生まれ。学習院大学人文科学研究科史学専攻博士後期課程単位取得退学、主に近世琉球の身分制や地域社会を研究。江戸博友の会古文書講師のほか、大蔵精神文化研究所臨時研究員を経て学習院アーカイブズで学習院女子部の史料分析に携わる。

- 開催日時：11月15日(金)　14時～15時30分
- 申込締切：10月31日(木)必着
- 会場：江戸東京博物館・１階大ホール
- 定員：200人　同伴者可(はがきに氏名連記)
- 参加費：会員500円・同伴者600円(当日払い)

【企画担当責任者】内田勝元・川上由美子(事業部会)

見学会

「銀座今昔物語」ー裏小路からメインストリートまで

◆江戸時代、職人と商人が住む、さほど賑やかではなかった銀座の町。その町がどのようにして日本で一番の繁華街になっていったのか。その歴史を探りながら、メイン

ストリートから裏小路まで、友の会ならではの「銀ブラ」を楽しみます。江戸のお稲荷さん、明治のガス灯、昭和のモダン建築、平成のハイブランドショップ…、少し盛りだくさんの３時間半です。JR 新橋駅で解散となります。

- 開催日：９月25日(水) 小雨決行、受付後順次出発
- 受付開始：12時30分　受付終了：13時　(時間厳守)
- 集合場所：JR「有楽町」駅　中央改札口前(交通会館口)
- 申込締切：９月12日(木)必着
- 定員：150人　同伴者可(保険の都合上、はがきに氏名、住所、電話番号連記)
- 参加費：会員、同伴者とも500円(当日払い)

【企画担当責任者】相羽久男(事業部会)

定番・江戸城周辺探訪－その４(外濠周辺)－

◆江戸城外濠(そとぼり)は、関ヶ原の戦い以後絶大な権力を握った江戸幕府が、天下普請による江戸城総構え工事として完成したものです。「の」の字形に江戸城外郭を囲む巨大な濠で、牛込から赤坂までは国史跡に指定されています。前回は外濠沿いを御茶ノ水～市ヶ谷門まで散策しましたが、今回は市ヶ谷門～赤坂門までを散策、その周辺に残る遺跡・遺構を探訪、最後に大岡越前守の霊廟のある赤坂豊川稲荷を参拝します。所要時間は３時間程度。東京メトロ赤坂見附駅で解散となります。

- 開催日：10月27日(日) 小雨決行、受付後順次出発
- 受付開始：12時30分　受付終了：13時（時間厳守）
- 集合場所：JR「市ケ谷」駅出口左手向い側交番裏の小公園
- 申込締切：10月14日(月)必着
- 定員：150人　同伴者可(保険の都合上、はがきに氏名、住所、電話番号連記)
- 参加費：会員、同伴者とも500円(当日払い)

【企画担当責任者】大塚　仁(事業部会)

ご注意ください

はがきは、10月１日から63円になります。

催事の申し込みはがきの消印が10月１日以降になる場合は、はがきは63円になります。62円はがきをお持ちの方は１円切手を追加貼り付けすることになります。

会員優待のお知らせ

●特別展「士　サムライ －天下太平を支えた人びと－」

会　期：９月14日(土)～11月４日(月･休)
会　員：一般550円、65歳以上275円、大･専門生275円
同伴者：一般880円、65歳以上440円、大･専門生440円
＊中学生(都外)･高校生は65歳以上と同じ。
中学生(都内)･小学生以下は無料。

●(注)割引を受けられる同伴者は１人だけです。

次回予告

●特別展「大浮世絵展－歌麿、写楽、北斎、広重、国芳　夢の競演」

会　期：11月19日(火)～１月19日(日)

企画展のご案内

会期残り僅か お見逃しなく！

●いきものがたり －江戸東京のくらしと動物－

会　期：８月６日(火)～９月23日(月･祝)
会　場：常設展示室　５Ｆ企画展示室

次回予告

●18世紀ソウルの日常 －ユマンジュ日記の世界－

会　期：10月22日(火･祝)～12月１日(日)
会　場：常設展示室　５Ｆ企画展示室

休館日

9 月

日	月	火	水	木	金	土
1	2	3	4	5	6	7
8	9	10	11	12	13	14
15	16	17	18	19	20	21
22	23	24	25	26	27	28
29	30					

10 月

日	月	火	水	木	金	土
		1	2	3	4	5
6	7	8	9	10	11	12
13	14	15	16	17	18	19
20	21	22	23	24	25	26
27	28	29	30	31		

催事のお申込方法

◆**普通はがき(62 円、10 月１日から 63 円)**に、
①催事名(略名可)・開催日
②会員番号**(必須)**
③氏名(同伴者連記)
を明記して下記の「友の会事務局」へ。
◆申込は、催事ごとに会員１人１通。
◆友の会へのご意見・ご要望があれば記入して下さい。
◆申込先：〒130-0015　東京都墨田区横網１－４－１
江戸東京博物館**「友の会事務局」**
＊**「えどはくカルチャー」など江戸博への申込とは違います。**

＊お申込いただきますと、「受講票」をお送りします。当日ご持参のうえ、受付で登録して下さい。
なお「受講票」は逐次お送りするのではなく、申込締切数日後一斉にお送りしますので、それまでお待ち下さい。
＊いずれも**申込多数の場合は抽選となることがあります**。
＊「受講票」未着のお問合せや参加予定変更の連絡などはなるべく事務局員出勤の**火曜日か金曜日(10時～12時、13時～17時)**にお願いします。
＊「受講票」がないと受講できません。必ず事前に申込をしてからご参加下さい。

会報＜えど友＞第 111 号
令和元年９月１日発行（奇数月１日発行）
編集・制作：江戸東京博物館友の会広報部会
E-Mail : edo_tomo_koho@yahoo.co.jp

発行人：林　正信(会長)　編集長：中村貞子
岡本 脩、福島信一、内匠屋京子、佐藤美代子、前田太門、菊池真一、光田憲雄、大橋弘依、田辺友紀子、小出雅右、横島利明、福田 徹、雨宮正彦
発行：江戸東京博物館友の会
〒130-0015　東京都墨田区横網１－４－１　電話 03-3626-9910